

「緑漆牡丹唐草石畳沈金膳」修理報告

佐久本純¹ 土井菜々子²

はじめに

本作品は一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵「緑漆牡丹唐草石畳沈金膳」である。令和5年4月15日から令和6年3月31日まで琉球漆工藝舎にて修理が行われた。修理にあたり担当職員を佐久本純とし、修理担当者を土井菜々子が担った。

I. 名 称

緑漆牡丹唐草石畳沈金膳

II. 概 要

隅切り形の膳で四隅に低い足を付ける。見込みと立上りは緑漆の地に沈金が施されている。見込みは、二重線で区切られた枠の中に牡丹唐草文様を配し、枠外に石畳文を巡らせている。立上の内側に縦横線文、外側に牡丹唐草が沈金で表されている。底裏面の足より内側は黒漆塗りで、中央に朱漆で印が記されている。

員数・法量 (mm) : 縦 362 横 359 高さ 42



図1 緑漆牡丹唐草石畳沈金膳

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究所 琉球文化財研究室 研究員

² 琉球漆工藝舎 代表

III. 修理前状態

火災の影響により塗膜劣化が進み、緑漆の鮮やかさが失われている。強く貼り付いた薄葉紙の紙繊維がわずかに残り、斑模様が見られる（図 2）木地に反りが生じ、見込みと立上りの接合部に亀裂が生じている（図 3-1, 3-2）。その他、見込にも数本の亀裂が見られる（図 4）。



図 2 紙繊維の付着



図 3-1 木地の反り



図 3-2 木地接合部

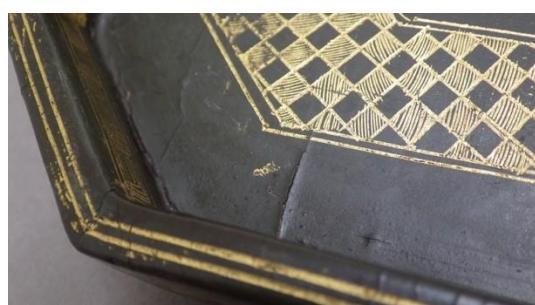


図 4 見込の亀裂

立上りの縁から外側面にかけて多くの亀裂が生じ、塗膜の欠失も見られる（図 5-1, 5-2）。また、見込みの沈金部分に塗膜の損傷がある。さらに、茶色いシミのようなものも見られる（図 6-1, 6-2）。



図 5-1 縁の亀裂

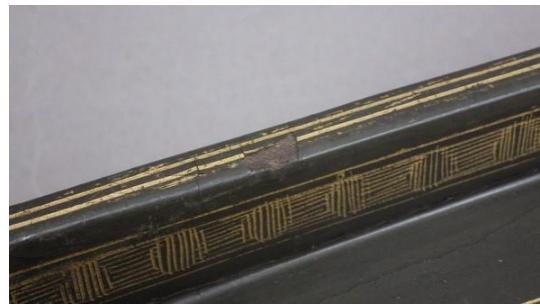


図 5-2 塗膜の欠失



図 6-1 塗膜の損傷



図 6-2 シミ

底面角部に塗膜の欠失や浮きが見られ、下地が露出する。足の接合部に亀裂が生じその周辺塗膜の浮きが見られる（図 7-1, 7-2）。



図 7-1 塗膜の欠失



図 7-2 塗膜の亀裂

IV. 修理方針

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、充分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

クリーニング、亀裂や欠損部の補強、塗膜の強化などを行い、資料の保全をはかる。火災により貼りついた薄葉紙の付着跡、油滴のようなシミは、可能な範囲で除去する。急激な塗膜劣化に対して丁寧な塗膜の強化を行い、火災前の状態に近づける。

V. 修理作業報告

修理工程

- ① 修理前写真撮影
- ② クリーニング ③ 漆固め
- ④ 亀裂部補強、塗膜押え
- ⑤ 刻芋充填
- ⑥ 下地付け、艶調整
- ⑦ 修理後撮影
- ⑧ 報告書作成

修理内容

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。クリーニングは、薄葉紙の纖維が付着している部分には精製水を含ませた綿布で拭き取りながら除去した。漆塗膜の表面に滲出しているシミには、精製水やエタノール水溶液（60～70W/V%）を用いてクリーニングを試みたが、効果が見られなかつたため、油脂の除去に効果がある弱アルカリ性の重曹水（3～5W/V%）を使用したところ、シミの除去に一定の効果が見られた（図8-1, 8-2）。重曹水でクリーニングを行う際は、汚れの物質と混合することで生まるる塩を資料表面に残留させないよう留意し、重曹水を用いた部分は精製水での充分な拭き取りを行った。



図 8-1 クリーニング



図 8-2 クリーニング

次の工程の前処置として、木地や下地が露出している部分は、生漆を溶剤¹で希釈したものと含浸させた（図9）。劣化した塗膜の艶を取り戻すため、摺漆を行なった（図10-1, 10-2）。溶剤で希釈した生漆を塗布し、表面に余分な漆が残らないように拭き取った。表面の漆固め作業は、沈金の溝に漆が入らないよう、溶剤で希釈した漆を畳んだ不織布を塗膜面に薄く塗布し、表面に余分な漆が残ないように、しっかりと拭き取りを行った。



図9 下地の固め



図10-1 裏面の漆固め



図10-2 表面の漆固め

別途保管されていた塗膜片は、元の位置に戻して接着した（図11）。その他、押さえが必要な剥離塗膜は、木枠と竹ヒゴを使用した方法や、クランプを使用した固定方法を使い分け、麦漆による接着を行った（図12-1, 12-2）。



図11 塗膜片の位置確認

¹ ターペンタイン/ホルベイン社



図 12-1 塗膜押え



図 12-2 塗膜押え

塗膜が安定した後、塗膜欠失箇所に刻苧を充填し、形状を復した(図 13)。刻苧が十分に固まった後、刃物で表面を整え、下地を施した(図 14-1)。下地は砥石で表面を水研ぎした後、漆固めを行い、色艶を整えた(図 14-2)。

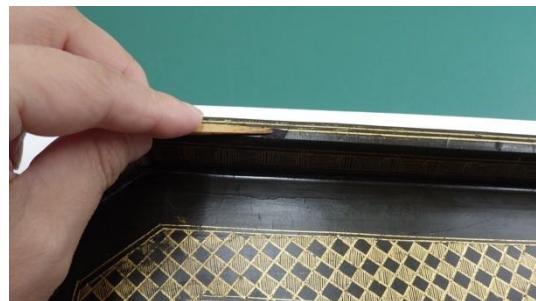


図 13 刻苧充填



図 14-1 下地付け



図 14-2 漆固め

最後に修理前と比較できるよう、修理後の撮影を行い、報告書を作成した。

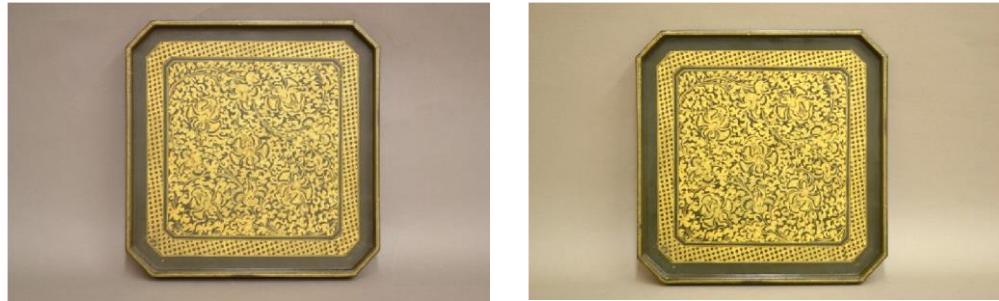
修理場所

沖縄県立博物館・美術館 博物館内修理修復室

修理期間

令和 5 年 4 月 15 日～ 令和 6 年 3 月 31 日

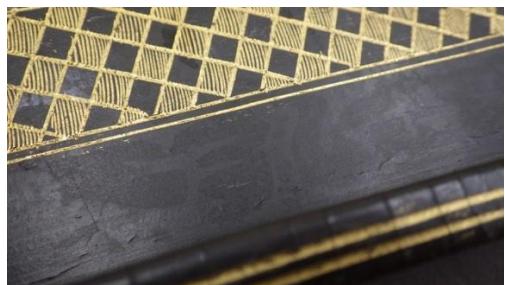
修理前修理後写真



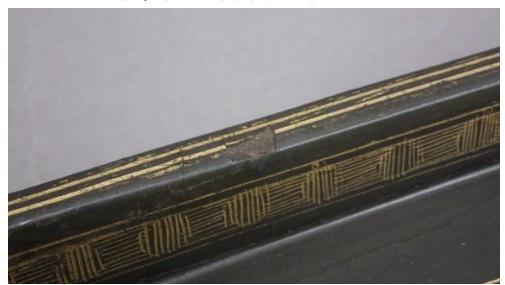
全景 修理前



茶色い付着物 修理前



薄葉紙の付着跡 修理前



縁の塗膜欠損部 修理前

全景 修理後



茶色い付着物 修理後



薄葉紙の付着跡 修理後



縁の塗膜欠損部 修理後



見込み亀裂 修理前



見込み亀裂 修理後